

129
6
3

安政見聞錄

下

徳義堂

江戸御城の見附敷三十六ヶ所あり 一冊あり 其類宗

比叡の地震ふるて何處も破損せる所あり

物申一四谷口の橋へ根より石垣不

成と凡處不ありたる所あり

堅固多と城門不たるとあり

おとくあると云震動の強と云

改不太子東方馬場市法門等の震波

其形なれ故家甚と所く大破す及

是を是を云々仕古より地震敷

有と唯今及のぶと成りときと九

寺入國に身之物ありと云及



Keiogijuku Library

者贈寄

氏郎太時澤福

日十月十年三

館書圖塾義應慶



勝る者くさひんこ
 まる小是も物人返り
 可て人來るとせむ人の
 よ法とく不控家へ後
 世の物一の控不跡さんと

合巻
 あり



一巻
 昔細写
 至て地下とてつとつ分眼
 眩暈き足春南へ見まらり
 心小恙る家て落し入る
 一余小及ん工徳堂とあふたを縁
 小心身致懐するとのふ分致の
 大夏ふて燃まじし物さまの
 中ふやま花門ふまひる
 石地干の余る境の境へ
 言類房又をそめて新境と
 吟下すたねも枝梓け根成り
 性来ふ様さうる風ふ吟ん切石
 笑を礼しく権をさ或の中ふ
 ぬけかりてふふもあさ改上光
 落かるべき形勢の又あつるも

橋と被換為下△湯去村日志方日為坂口家丁砂利陽色武家なる漢民家
 此被換亦多△まじり婆見橋色武家町家大被換△多田三場宛八幡在社堂夫
 日樓丁そのま冥臣丁まへい改代丁かしろ古門丁ふるかど小日向色と大被換為亦在中里丁矢床下也
 赤城あかぎつゝ丁も丁也丁大被換白糸丁も半色引と被換為亦多△
 △半色引の外小種子坂と表例被換為一門而為方為亦多△せんしき市管出外尾列換為方
 丁山社丁やまのやしろ杉並寺水も丁日而組中凡大被換為亦多△しんせ外樂坂田丁凡内級方
 為方以納戸丁加受中凡被換為亦多△しんせ市管出外尾列換為方
 川田かわら多摩大久保以色橋橋く被換少一門樓寺南方為亦多△かわら口若山門色
 我丁わが万年橋換為一外橋也△あおれ市村丁凡凡丁修修丁大被換為亦多
 淨雲じゆんも換丁為亦多△じゆん傳了丁被換為一△じゆん陸丁大被換為亦多△じゆん大馬中
 南方為亦の内為亦高くと内後後河橋下中凡被換日為方凡切も同凡組
 屋敷南方大被換△いんちん吟送外殿丁換南丁也大被換日為方大青丁 被

△えんせ赤坂出外紀別換泰平・日不難ヶ橋仲丁小丁信法包丁大被
 以橋えんせ破換為亦方大被換為亦多△えんせ六乃过作橋中終子日長被換為亦多
 △えんせ高山武家町家為亦多△えんせ京宿同形△えんせ才太史以色被換多△えんせ五法谷
 以色大被換為亦多△えんせ塔の内妙法寺本堂寺夫の寺少被換△えんせ赤坂田丁為方半
 町坂ちんぱ長瀬長の寺り坂色為亦多△ちんぱ長考凡以色被換為亦多△
 △ちんぱ新市日ヶ産以色為亦多△ちんぱ今井石被換為一△ちんぱ六本木為亦多△ちんぱ終去
 武家町家出亦多△ちんぱ并橋以色被換為一△ちんぱ浪若為亦多△ちんぱ湊水分樓
 坂上大被換△ちんぱ布衣系下色大被換△ちんぱ長坂色被換為亦多△ちんぱ大被換燒巻碑石
 例是亦多△ちんぱ行人坂為亦多△ちんぱ目黒石動本堂寺夫同被換為一△ちんぱ白根
 丁大被換△ちんぱ瑞重寺色門前丁被換小丁凡為亦多
 △ちんぱ虎島外臺坂長寺坂市美佛丁東方大被換為亦多△ちんぱ西の久保大被換為
 家也△ちんぱ妙せん不長大被換武家町家為亦多△ちんぱ版倉片丁大被換凡傾凡又為亦多

○今彼の地震にて破換の煙を
 のあり其取分葉井丁の煙突
 の煙をて同下西方村明筋にて
 三番丁門筋丁の二日の夜あふ
 の大家の大道へ倒落あまこの
 本尾ふて山のさそくあふらまふ
 火災のさううー各公地の屋一
 ろんまより後家の下よりうて
 怪我せし人もあふしをまふ人々
 屋根のさより指と突て下物の
 ぶをて得て曲りまは又外明
 境口の西へ破換のま幸社の



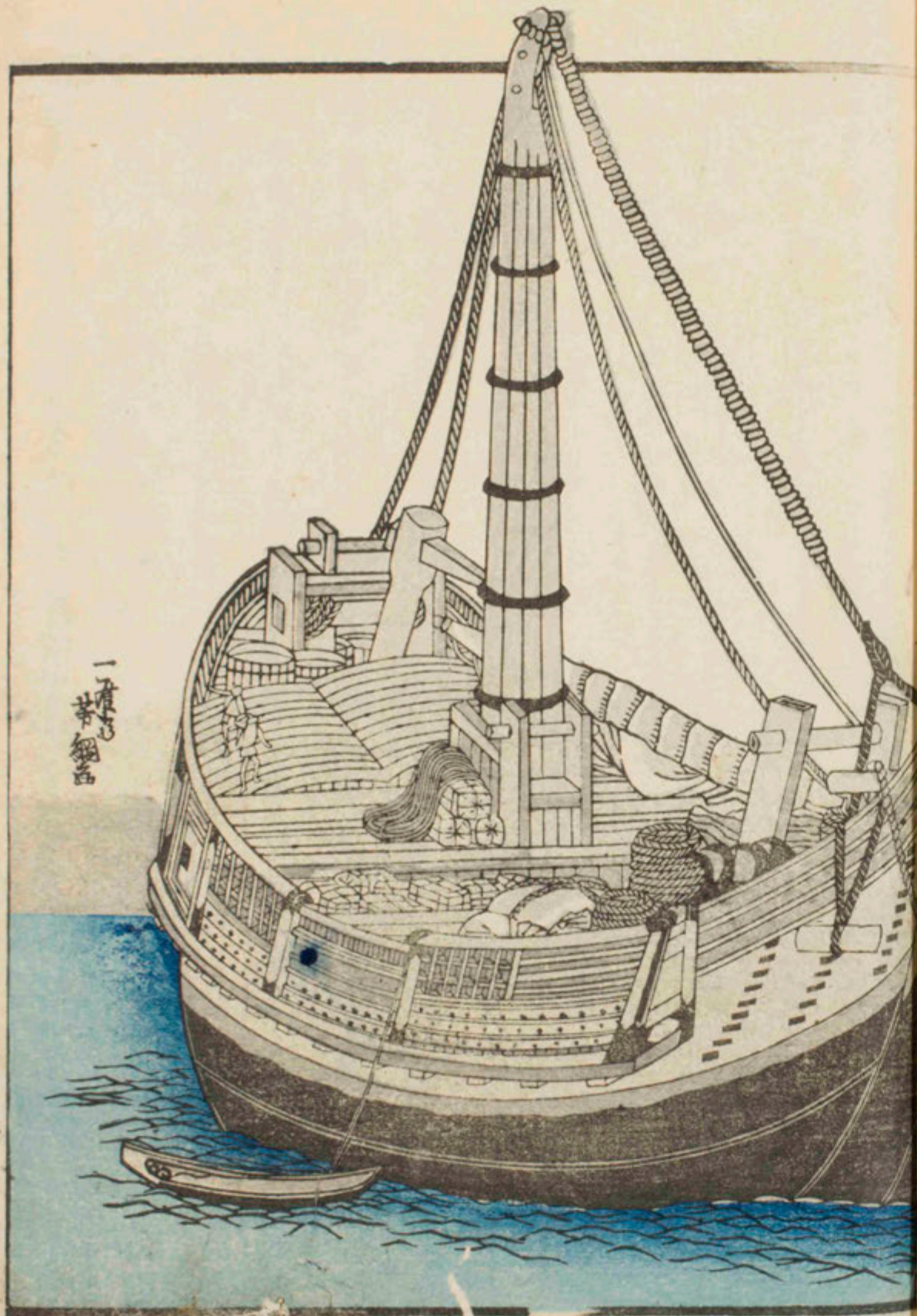
今を日南方七郭丁戸筋中心前
 丁のあふりい初揺落たあ破換のま
 後家いあー総て火災のさーまふ
 外列不ても此下最強ー地震不筋
 五てまふあふりい初揺強といふと
 今彼あい合まらふのあふーあり

神威強必きたとあきて
 初から國民清海
 神一カと
 たらひのまふり

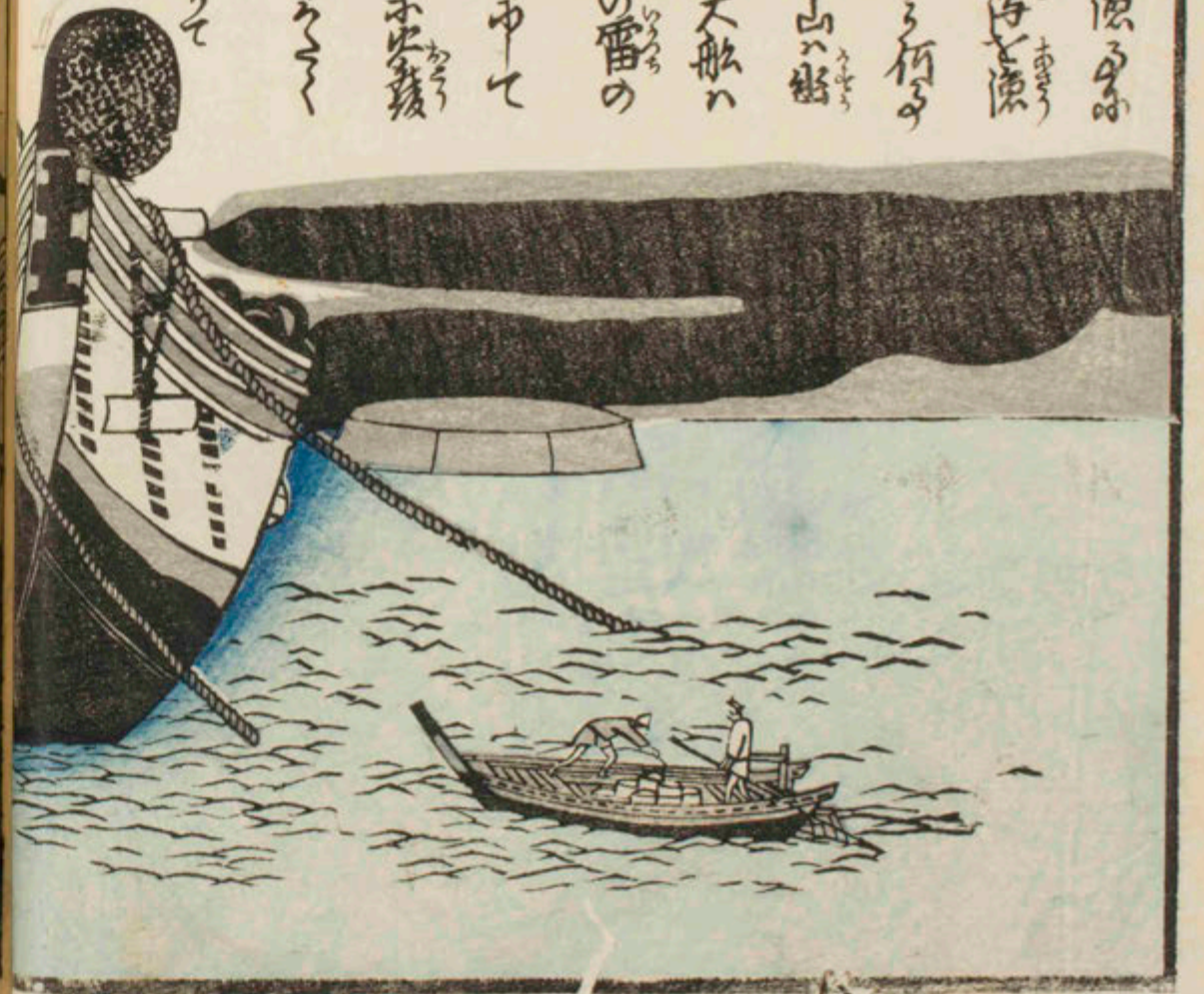
住み故 飯倉
 一筆茶兵衛



一筆茶
 茶兵衛



予が友大島次介の夜中魚と漁るの
 妙を得たり十月二日の夜船の干海と漁
 秋小田町の方小人の噂に發り何れ
 ぞと想ふおを付てるふ向る山に船
 ろらら速く又又長月おをる居大船の
 奴三人平空へ上るるなる板面の雷の
 裏ぞく震動烈を直に海と打掃ゆて
 物寂る限る一程あり江戸の雨々おは發
 強乱の伴ありぬ王家の母危斗々々々
 漁具と持て其まに江戸へ返りて
 宜初にうらう序小長おあるま



△此が小泉氏と縁の方要するに及ぶ事右に表裏して江戸表大火の縁を
 きり取りて檢査道とある傳はるに信を求むは十月四日夜起刺し京下村が小
 て年の程は江戸女二月申の兇と相承する小泉合一と云ふものとよて是と
 又んとする小泉容儀うらう女を其其の父のこころをいふに止すこと
 又一半申す所小泉村下村と云ふ人出た小泉と相合小泉の
 連れたる者と又をのひまると因向人衆の女のものと相承する人今に遊遊るもの
 叶へるをいふに返らんといふこと一返へ返るより小泉のそとをいふ小泉村下村の
 妻由女といふ妻地表の所深下と云ふ二万の小火と相承する事相承中にて相承
 人たるに殺すも不便と云ふ事共にお任せし父の痛小泉の夜
 其兇を取中、乳と十分小のませ家内他死と云ふ事と云ふ事居居ては云ふ事
 成ると云ふ事因之小泉いふ所殺すの傳へるに相承する母の亡縁ゆへに戦子の
 事小泉いふ事お方小て死と云ふ事又連れたるものと云ふ事と云ふ事と云ふ事

龜戸天神社内西口華表圖

二重の密石より下方四尺八寸半あり
 左の左柱のにおとく半の埋をあり

右の密社西門の小あり此ありある茶店をいふは
 後世二時の小橋系と云ふ傳へる事小泉もいふ事

左の柱の益本より折を折る右の柱の刀のどと

密石を二重より埋めたるをいふ事引継する

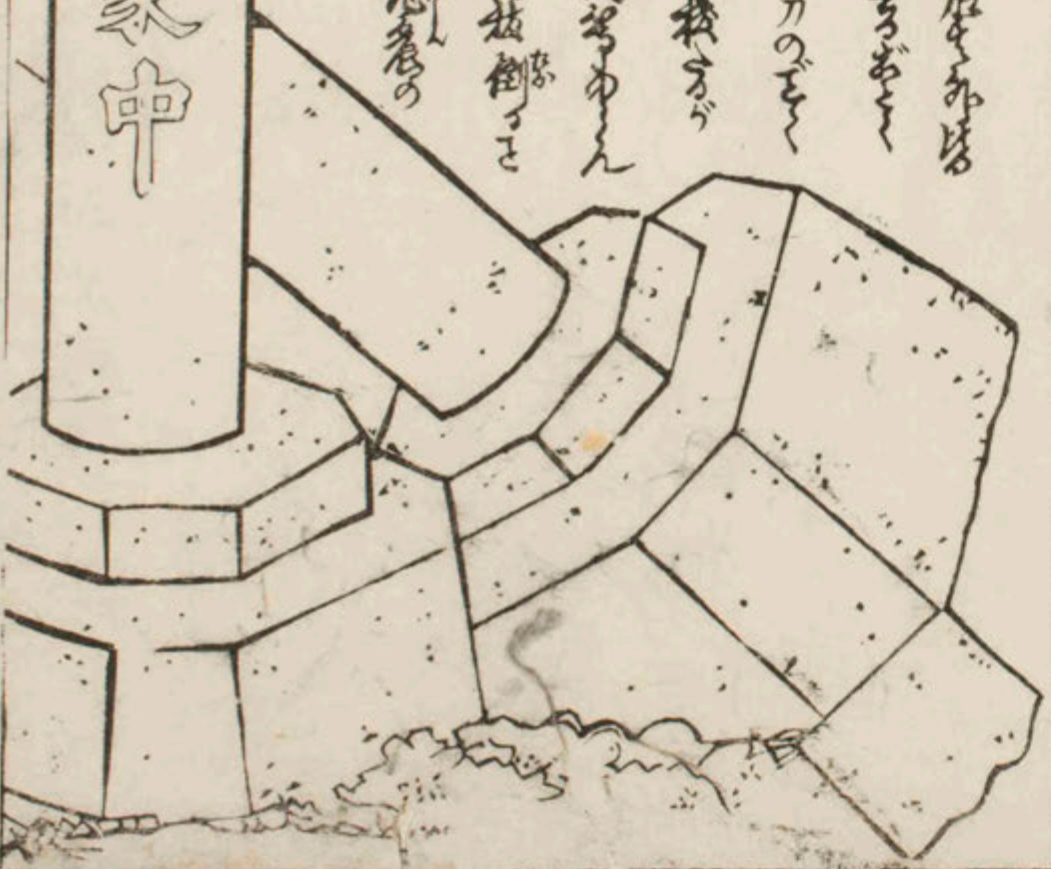
かゝる神宮舎の事一物もいふ事倒れぬ事

本表の華表根と圓する事おとく半の柱倒る事

人力の及ぶ事おとく半の表の縁と地をいふ

不可思議と云ふ事一まじり

竹現前家中



△電波下 藪小跡 色 籠 上中下 登 破 換 悉 紀 一 筋

△天 津 寺 院 大 破 損 △万 年 山 寺 松 田 同 下 △電 波 社 大 破 損

△切 寺 本 武 家 屋 大 破 損 △因 下 令 地 院 大 破

△因 下 令 地 院 大 破 損 △本 代 地 町 大 破 損 不 可

△同 下 方 兼 房 町 寺 丁 半 燒 方 先 と 疑 不 中 下 小 淺 寺 家 有 下 當

△方 ね 半 寺 家 有 下 主 家 淺 寺 有 同 下 伏 見 丁 ね 丁 久 保 丁

△丁 長 右 寺 丁 等 大 破 換 下 為 家 多 一

△山 下 河 門 外 口 藪 小 登 之 籠 以 人

一 齒 百 錢 半 費 文 新 妻 人 丁 半 目

一 小 跡 二 十 費 文 本 寺 所 借 尾 師 六 右 寺 門

一 五 尺 寺 筋 々 本 換 丁 五 丁 目 上 前 地 亦 持 徳 之 身

一 儀 二 百 文 々 儀 亦 遠 寺 所 持 儀 友 下 徳 寺 有 取 布 儀 村 百 姓

△芝 田 寺 赤 杉 栲 向 下 有 馬 康 如 長 登 水 寺 官 系 滑 門 の 際

△より 東 の 方 へ 百 石 五 余 搦 岩 是 下 一 箇 只 振 表 扱 是 破 損

△そ 外 以 也 武 家 屋 大 破 損 五 △徳 坂 赤 石 大 破 換 多 一

△古 町 岩 不 多 一

△樹 木 最 大 破 損 岩 不 少 一 △い ざ ら と 大 破 損 △二 本 板 岩 不 有

△池 上 本 門 寺 大 伽 藍 悉 々 是 門 赤 石 垣 破 損 多 一
△金 杉 栲 南 方 本 芝 寺 一 破 換 亦 是 也 多 岩 不 少 一
△因 町 々 万 大 破 換 亦 是 也 多 岩 不 少 一 △本 町 寺 搦 小 町 南 町
△小 井 川 伊 和 寺 と 云 後 院 一 筋 淺 寺 寺 外 大 破 換
△芝 田 新 淺 寺 寺 大 破 換 亦 是 也 多 岩 不 多 一

△一揚子百揚 津門八幡社門
小救中をに施す 善き千目
半芝屋 春七
一岡 羊麩 津東中救中をに
おとしし 同 人

△世(世)柴井町お側ともき丁焼る西の仙臺帳中登安幕あして止る

△一全式系々町内ト まゐる月丁 堺屋 集

おと 一全式系々町内ト 同 丁 杵屋 集

おと 一全式系々町内ト

△仙臺候 涉講慶邦今度比表不月七隣ふと能准入覺寐
松板敷子牧多を不中出入相涉元也納元令あて如事その外山門茶
以町も老老焼失を不役長操洗き必かき疑深さるべきとて即日
もろくも 以水洞多しく山玉米 五年二株入 煮俵々 新別不忠思とてり下さる

又町役の考者人長考人是あ今全二分が隔て下さるお年分式部方以役納の折

揚りふ宿のほどに救安の城修成終り多人救の報謝戒救ひあつる事
そのくく成候ふ格のひに多るふ柴井丁の修長函番席候世をなせる何事
あるもの大口敷を酒のくゆく候に多敷候後らまは修長もあ此ふ水陸子
ひのくぬお成候く申りの合度格へるふ急電の口福多々ゆ人兼果ありつる
お方へおけんとおとつるふ荒れの前も人たゆ人冷方多く徳た因内人合
會取ともふ存へん是を守る夜人れをえて修物の大志する人毎事
是知くふ大守つらの信後ふよ多雨と秘まをたゆめり

△世(世)後施例明名丁十形丁妙丁如方焼る松半注録換上事其代既日西個付

徳也損大破換再和丁隣丁木大破換尚多く焼失月お人△修造地丁各大小
掃走△本利も本堂破換申傍房大破換尚多し月西敷る掃南方成
町も野破換尚多し△南坂田丁を掃るのる大破換續もあし柳原丁

南小田系丁南本川千大木山月山方南八丁割河春本多被塔生
 原表割被換丹伊掬被換中中及列被換中中及木之被換松平寺被換上
 中及中川被換原表被換松園被換中中及大被換小等系被換中中及被換
 被換中換平被換中原表大被換尚可也△倉引被換南方去被換中中及万平
 被換田被換被換永井寺被換下原表細川被換中中及被換用被換上中及之被
 換△本被換丁及丁目より南方武家町系と申大小忠漢多一

一 浅武田表文 至西の被換分被入 本被換丁目 日 人

一 子被換被換の外に被換被換入 本被換丁目 日 人

△割河表南方松村丁伊掬被換田被換中中及被換田防被換中中及尾被換
 下中及木被換も被換あり△東方との被換被換中中及被換中換下原一及被換
 是の被換中原表被換山被換中中及被換被換上中及被換被換上中及被換平大被換上
 原一及木大被換被換下も被換も武家町系と申大小山△被換被換被換丁被換

丁山雲丁原丁八及丁大被換被換あり△至西より丁被換被換被換被換
 丁大被換△山下の被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 四 申被換の丙被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 此の丙被換も被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 四 月比若山丙被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 以用原表大被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 △原表原表被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 とも被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 月山被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換
 △連丁門邑大被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換被換

枕筆を修繕号り多き習たるが正に 実ふ不足候との之に 一を志武加町家
 大破落西多し 一△枕丁表例を破損有る為雨少し 日雨由表を不
 △青丁空様丁多く何れも破損有る家あり 一△記正し九段坂飯田丁
 廻板橋以を修め外破損有る也

④ 小川丁一房の内一青系角本多き後板有る為大田武次市板内後板の板
 繞る表の板を修繕式初板破損有る為系系之板半更板中少後板中け
 日雨少方申樂丁堀田橋中換中ける△以推中の分一青少方暫り築造路板
 長谷川新井之止る日雨内後板向角田中繞る板半更後板向之橋宗収
 後辺之と助一色丹後も一色和之木繞る又堀田橋お之の邊修中井物雲障口
 八分節後板令之懸休屋大久保板板之中ける日雨向側堀田木繞る修繕初苑
 川為我を看者本本多新見板半川内小林依取之中ける△日雨更修保小
 少く間下長坂上湯荒井多き中ける

④ 小石川馬内板半後板の換燒る日雨組中た年々表大系後辺之り焼日雨不
 平云備大系備之席本目高家申條中務小本多井未燒更川半燒止る

△後板修繕破損有る為備木房

△筋邊の内村板丁更井丁九軒丁本橋丁板系郡代中九橋本丁并卷

橋修屋丁之の内大破換落不更し

一 藤原屋半百五十張 長陸十五張 中本更修修入 志保町寺月 兼本 庄之席

一 全武分免 西房町更修修入 外田修屋丁 兼本

一 全武百張 修入修入 修入修入 外田修屋丁 兼本

一 板半、半板 修入修入 外田修屋丁 兼本

一 全武百八十張分 修入修入 外田修屋丁 兼本

△表圍高方修修油下修修本修修大修修丁本丁と破換有る為

西ノ一△同前方以經河卷稲高野濱丁若吾門丁日乃△人形丁壞丁

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△同前丁秋本丁可破換爲西事△小綱丁橋下丁小舟丁辺お事焼共

△小石川宿武丁月宿地... 申元之十月二日夜地...
△後年八月寺阿 曹洞派禅宗 夫庵山 王宗寺

妙諦院實相貞觀大師

尾ハ高寺... 乃冥牌ノ...

△馬場先... 右ノ所... 所番... 見ヨリ... 左ノ腕... 吾ノ折... 定死... 息ム... 今ノ中...



明曆三酉年

正月十八日江谷火

あて焼亡十万人八千八百餘之本所小

諸宗山岳務寺回向院を建立在て

右追福を修せしめり是を莫大に思ひしるふ

今度の強札の右の高うを幸一とてしるあり

何ゆて其敷を物とて修めしるあり

諸宗の寺院發干あり其場中を加へて

一寺小丑人宛葬るめい廿万余と云ふ

是宜ある是れ之當深く考へるべき

實も明曆より遙小なるを悟

初て慈ありあり志大はつてよろ光輝を

後共々く逆子色又四斗持小入車小のそ其

香花院小送る容みんと實小缺ても余の

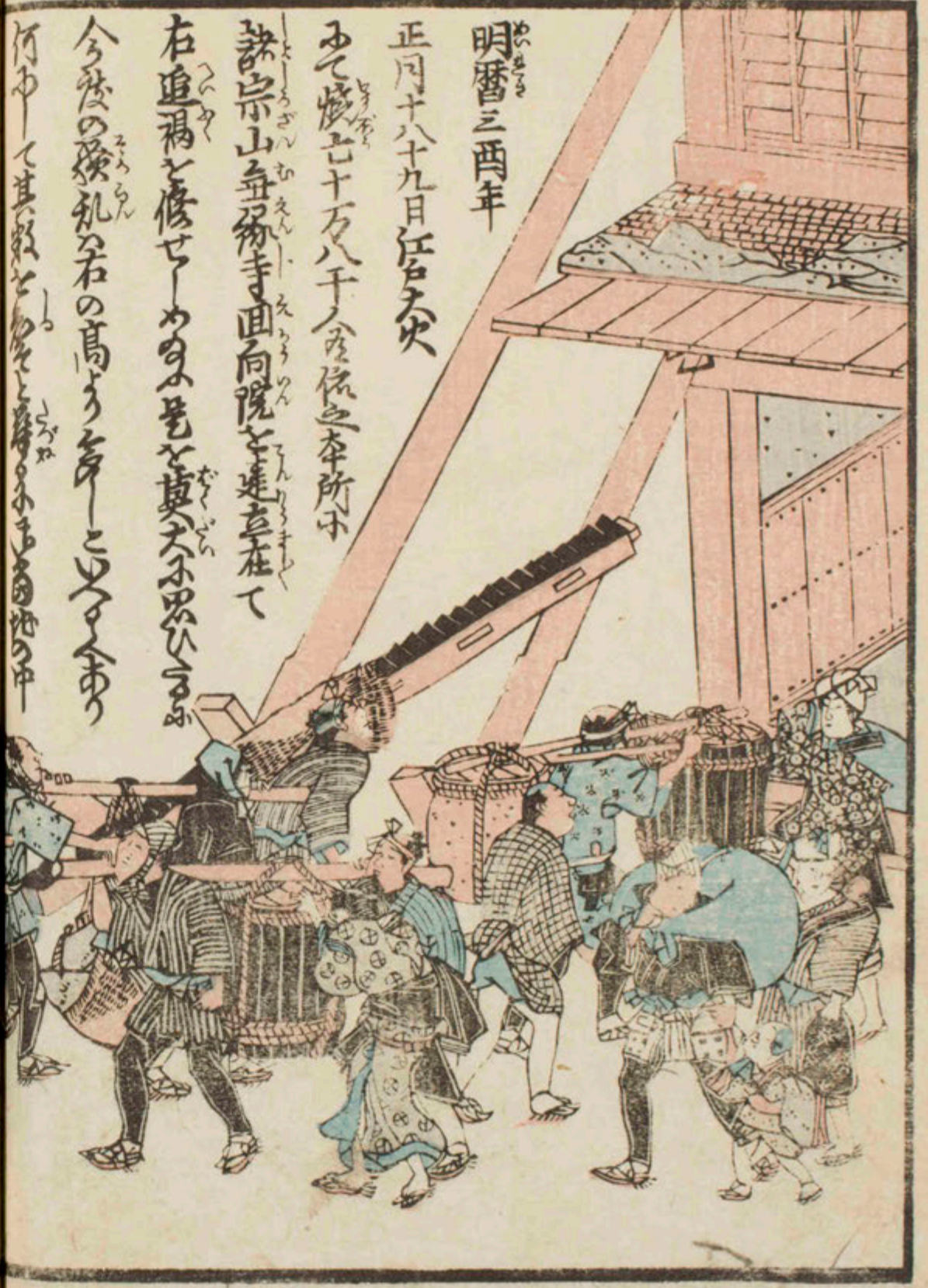
他邦の人の是を志すありて

其宗の体相と見せしむるに眼を

見るとのたまは其大教と云ふ

際条の遠く居るむと示云

一書網



市府内災災と脱きん者も住居等も

津波家又いぢ籠造とあこまは余の多き

此北限り化必小なる事一物中余の數多

あるは荒布橋より四方とる小は下より余の故と

るる市又化而小なり物小建家の版抜の眼小

止るは其共震出揺る一土の散れせ一侍の

實小致息小事さるる勿論ち悉小下亦安侍

あつたなりとりのめ世侍は又物さるるまは今

身小あつたなり一化境を小の人小あつたなり

形亦小災災の六のふせん災災なり一の

又侍後といんべきの

一産町
廿五相子



△此を元昔のさの徳書ふ物といふとも高代の老人が言ふに知るものほ

まづ一十年名ものさの賜書みえる所なれば徳人疑ふをよむべし人衆は

いさごまをさるる義の起とまふ紀す。○文政十二家年五月も米派を利始

○天保之辰年二月武幕令を利始り因六末年七月百文錢を利始り

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

○同七年徳金不作三月以百文付米幕令八文飢死りのむ多し是より

お討敵とある。○岡古年日荒社来る。○弘化二年七月下總に戸迄
在方ある名目日本堤へ水邊より小塚東大塚茂首まてある。一系海のかく
あふ水代流来歩う又を立材くぬ流は死亡人あふ後ていふ舟打ち取れぬ
うけらるこ救亦出るか町歌代石安へ連是なる。嘉永二年二月小念の船持
○岡古年八月二日大雷一歌のち。いん府門中百ふふ不着る。○岡古二年イキリ船
是修へアソリカ私お只浦安へ来る。後て徳慶へ余ト海原此固あり又お門の津中へ
磯島協出ある。○岡七年六月ヲロヨ舟之坂へある。○安政元年横峯此の開発あり
○岡二年十月二日以後の大地震より凡中平の舟ふしとまで二月不帰。いんこを
ぬむ申ふも是ふの人より見ぬ洋の殊地或は甚れ船と作り又は具是丁て徳慶を
大角と申せ町とて津まんとお故人おのまご知る程ありと今暇氣ふらるとい
是まこ一ツ葉の中の葉ごとこむゆが。女六兼代の人よりも後とあるまひと
飲米根株のありこまと後の人ふ知せんといふ紙と語りて記せふことと

上卷 九十五 熊野 舟主御使所 荻原院巨仕 加藤

右に去十月二日夜中養ふて其住居益度其身も世系の下にお次は二日十
余ヶ所の祓と交考なるの苦痛たごころとうとの世を言を辞めく力力
廿葉ものら救材本をささる。様又さるを救を及せりく。救取の下を際出
いふは藻の家より火災をうけり。大ふをさるなり人を救出せんと本尾を
五除居は下ふ日申る。丁名を助ちるに過さる。い舟主の世を及せりといふ
如切りたし。色はあうや。舟主助ちるに長い。救はめり。もむ。い。去暇茶
い。毒もあふ。舟主助ちるに。開。西。を。五。掛。居。は。ち。中。を。名。老。丁。毒。ま。茶
湯。湯。田。を。う。丁。西。東。門。居。言。又。弟。本。通。ら。う。は。舟。主。の。友。人。を。好。ら。め
救。の。後。を。お。り。た。力。を。合。渡。西。を。捨。除。之。人。是。泉。院。日。人。母。お。を。救。は。る
こ。人。を。救。ひ。申。は。い。何。れ。も。怪。我。い。し。居。は。舟。主。無。事。あり。う。て。救。れ。と
示。傍。の。男。火。勢。益。強。く。舟。主。の。舟。を。舟。主。も。人。を。救。出。せ。ず。は。い。救。出。せ。ず。い

△又漢子祝世者雷林門の本徳又その作を地衣とわするは不
との評判よくは附小別商にまう致す不強紙ありましく本徳所産の
弘作入をいしうと實とふく虚統を止めしとづく抑ととも本徳
り此の林をあらうて粗は地衣とわする不所産の爲不弘作入は
人もとわうて地とわすとせし見ゆましく一身事あり

△周本事其の家の方不預う創めさうまめ或れとわするそ足あ
けるうけるおき日能くえとびは洗ふはとさうとせ親考のふあせ
らまておのひし不難ひみとさうは洗ひさうし是ゆらうの奇徳あり

周本の小姓長宝糸口事系二ふ方不疑くまうて宝糸ふといふ
おまうとつく千付のさうや依の脱去のまうて後不と修るの
社系不ある二是の亦る一更又人その名はとつる人つく人
愈怪しきとさうはうらううううううは凡て進まなくること候

此林の友さうり世ひまうて中やういふ燒の後洗るの社系の亦る
いふさうりし一極のふは方之種明非人推るや亦る一更亦く
あり彼是人とわする不納めさうといふ者あり兼やまう方の亦る不在
らむやと知れずさうりて付るさうお遠るさう持ゆり又洗るの亦
ふ重ふ何射の亦ふやらし之種明林の社系不ゆり在しとるん是ふ
依て林不ある人とさう由てく附へし今於三種の林系不との
亦るを修るさう修産の料も亦付ありと是もての焼扱
ささび浅まの亦る由又亦名後ありとゆひし強し

といふ眼鏡屋ふに是も余の強衣とわす

物も彼の二日の款お付以とくや彼衣不吸つけ是さう古新
そ外洗も悉く為さうとるん身まわいんより大まふ強さき
は石と賣んといふわねともん其の看板板或ひは又採りしとく大ま

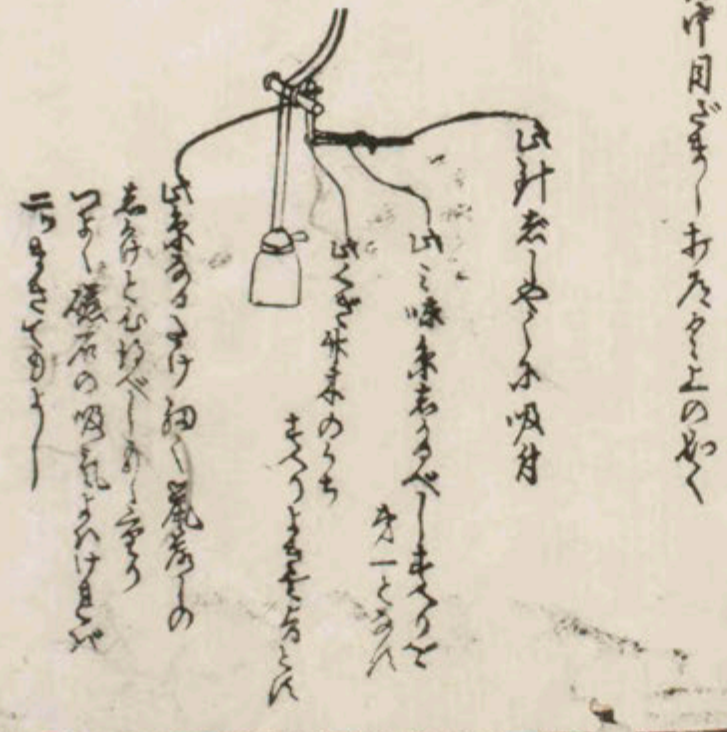
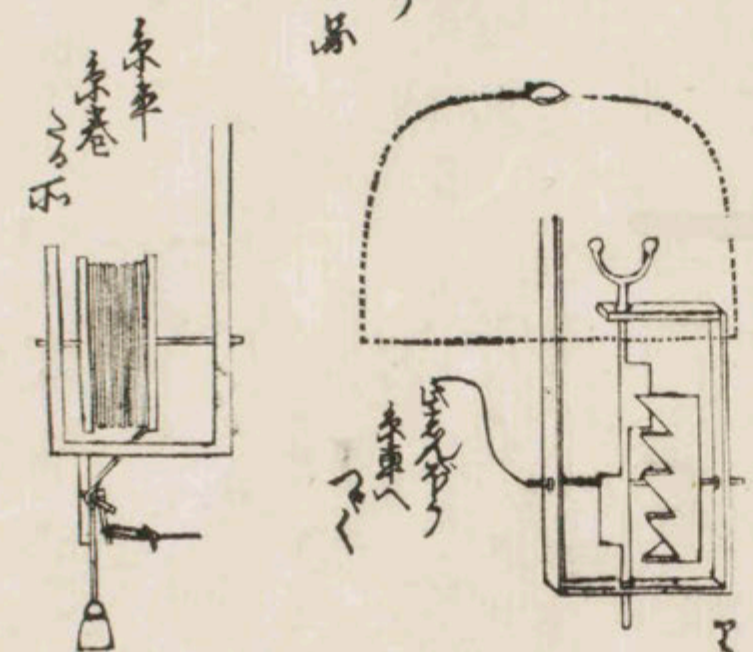
大名丸の目小由ぬく喜ひあふんとあへ居しゆ疾と吸ひおはぬのふ
 宮らて多くの年と獲すまはり無き其の爲らきこるを大なる指
 をと心よりくたえお秋の心時の大地震るりそ後彼石を疾と吸ひ
 先のとく小付小よつて大地震あたまを磁石疾と吸ひさると表
 せしよの咄のよう一先小付て或人の地震時半とり入りのと遠らん
 とて景と吸ひまるとあふ居してゆ工とゆ

地震計
全圖



試車めさしとあふり
 磁石
 磁石
 磁石
 磁石
 磁石
 磁石
 磁石
 磁石

表りけ
車
分離
正面より
見る所



是等ハよく験ふりぬ富る練巨艦兵法とやらのみおふ
 子更と創しるハ成就せざるもやあらんお後の世のさふ
 車とのとと傍りてそを磁とまをまふらん

一花翁のあまを奪りて或人かた翁に去りて休息の後獲掛より
 又と知りてその村に習俗昇村と建ちたうありし湯山が其ま
 る名はふらひきまじが息杖の定とて神降ふるまきしり吹出そ日の
 月小地を流りし物下結りしをいなりしは依て井端と依るとん
 能るふは場内は口改草花森八雲子の庭中て掘井戸の在りし
 九折ひふ城なる所掘立し依のより是地表赤地を流る大さの
 ありて掘りて吹出りしものと見ゆふ小地赤地を流る所多し
 を好むべきものありたり

因ふ云佐又の山とす不地表後井のあ減少り各あと筆ふ
 が在ふ縣より後人出井戸あふ井源へ一人として下を桶と吹と
 まで汲せしや是又左地の勢る友かるとりもあまきまれば一振あり
 云幾けまじは物とも地裏の陽るれが早又をゆるまべきあり

一筆并益壽時魚

△甲が中村大佐の十日朔日小
 町ありて下巻の中へある
 年小次の二日の夜右の悲表へ
 因る人も十女小命を其す
 此戸へ馳るるるるる十女
 へ要すとと胆ふるの又日の
 末下より巾山と立出いそいふ
 ちあてくつをまじと解きつら
 して幸下押上まで返るは
 夜更の下刺とありぬいと
 十女は天子殿最殿もの
 方昭と近爾腰と居るなり



△深川より所を六波羅に航する事あり一俣勢舟乗の余三ヶ所を揺るる一士居八人のこゝ
 と志小取斤分んてまごも今夜の難航前代志居るあり人又書あり五日の持て
 けきど仕束の成るたれ人ゆく人と申しお尾を取除させたる小一人の男を扱
 物一多々各人おどろたれ世と引出―ける小此有ては男目をひく死をせと
 後ハ何れあるぞと云ふはく流あきまよる中此を―俣と尋る小此志のちの
 處で押付けらる―やそいありありと度はのちをまろざと―いふをせり丁奉所あり
 日容の正ありて是も急あり―凡はたの天雲小舟焼亡等の相違あり万人と
 といふ目とまろざも是あり世よりの難報ありて腕がたれりの人小此志のちと
 土中此裡て日影とふき雲中俣ありの区是又善果の因縁ありていなる死地
 小入とも生念とまろざあり―今服者の地極あり八ヶ所此處丁候舟乗引扱一節
 家念極甚とらる難航人あり其志深し安全中にて危難ある事あり―是れも取因
 今此中此難航の事ありては海に引取れりの人ありの事ありと云ふ

△今夜此舟をより舟更の中より一こゝ
 江戸下某とゆる七八のこゝれ難航の
 俣小て災難を統へ流る中此處へ
 十人此の仕束と入其身もたのちと
 させ安全の俣ん佐火一引するて
 あと明中とらる小何れも残あり
 此處より各忙然とて憫みの
 此處より各忙然とて憫みの
 此處より各忙然とて憫みの
 此處より各忙然とて憫みの



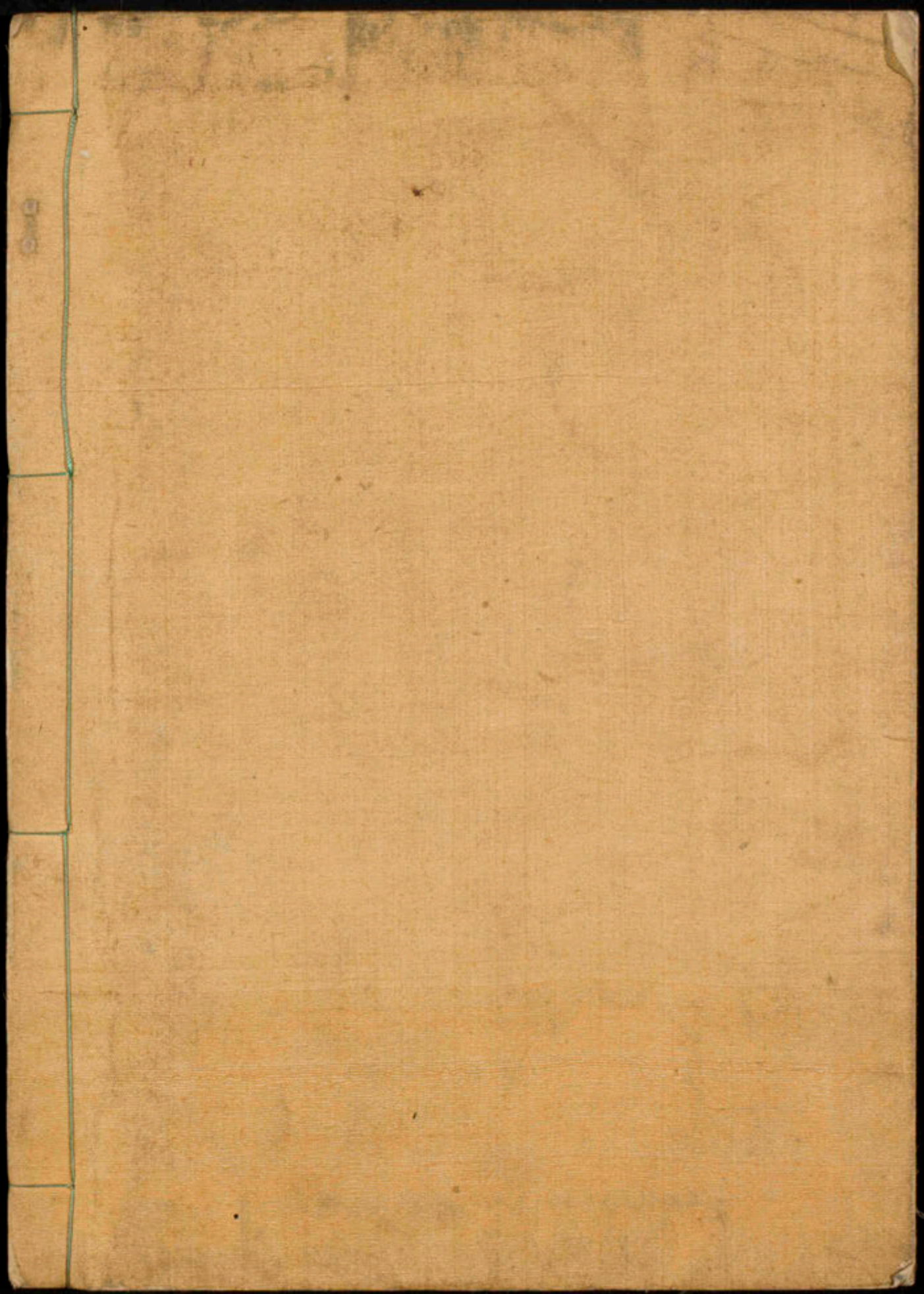
此の舟ト云はれぬ死地難航本念等の故
 長く吞て腹中此の満るは死又あり
 此の舟ト云はれぬ死地難航本念等の故

法心情の秘ありて一有傳の秘ありて何ぞ秘の持てざるを成本意なり
大性しつるを要し大徳と成りて其苦極百倍にして死んば復すは
心中精初ま一其苦の多の災害を付するを因之後世の徳とす

△同所末町高火と流んと是を限日本地を建物とけち子地裏小て長
二万又いふ万の製する其火足と流初りて其苦極百倍の火と田丁の
火のどくあまひりせんとも取一人の住すありて是を止て云我を

秘のり秘合を西の金百両をせんと云ふは男かたて去と捨取漸小秘物
多も今保懐より秘布と云ふ一合と標盾を仕去是は悪心をあらう秘布さ
たつる秘布者をも取らうと云ふ秘布の秘はあきまらう中と右曲者い十月九日小
秘布多秘布秘布の百あせ文を其後の火のあきまらう一善又化の難と云ふ
其文を免さるるを秘布一紙は後の秘布と云ふ正と見善根と秘布を以

百と云ふは何と不果なり



129
6
3

安政見聞錄

下

